

1 山形大会概要

日 時：平成 28 年 8 月 3 日（水）～5 日（金） ※分科会発表 8 月 4 日（木）
場 所：メイン会場 山形国際交流プラザ（山形ビッグウィング） ※第 3 分科会 中会議室（4F）

2 第 3 分科会の概要

テーマ： 「笑顔が広がる いい学校を目指して ―岩手の学校事務 て・ん・で・ん・こー」

発表者： 下村隆、菊池和子 司会者： 及川正良、吉田純 記録者： 村上誠一、長坂征子

助言者： 木岡一明（名城大学大学院 大学・学校づくり研究科 教授）、
福島正行（盛岡大学 文学部 児童教育学科 准教授）

発表要旨：（大会研究集録より）

岩手県公立小中学校事務職員研究協議会では、平成 20 年度の福島大会において、

- ・学校事務職員の職務確立―岩手の職務確立論
- ・学校事務の共同実施の在り方について
- ・これからの学校事務をどのように構築するか

の 3 つの特別委員会答申が「いわてのグランドデザイン」であると全国に発信しました。平成 24 年度には、これら 3 つの答申を具現化していくために「いわてのグランドデザイン～みんなでできる実行策～」を策定して具体的な取組方法を示し、各地区ではその具現化を目指した取組が進められ、県研究大会で実践発表を行い、交流を深めてきました。

いわてのグランドデザインの根底には「学校事務職員として何ができるか」という思いがあります。学校経営の目的は子どもの豊かな育ちです。私達は、子どもの笑顔が広がる「いい学校づくり」の一翼を担う事務職員でありたいと願っています。本分科会では、いわてのグランドデザインの具現化が、学校事務職員としていい学校を創ることにつながると考え、県内各地域の実情に合わせた取組の実践事例を「経営参画」「共同実施」「研修活動」の視点で紹介しします。

また、より良い学校経営のために学校ガバナンスは必要不可欠なものであると考えます。目的達成のため、組織が一体となって機能すること、その中心には子どもの笑顔があるはずです。

子どもの笑顔をイメージした「いい学校づくり」のために学校事務職員として何ができるかを考えます。

討議の柱： 「いい学校づくり」のために学校事務職員は何ができるか

分科会構成： レポート発表、グループワーク（11グループ）と討議内容発表、福島准教授による講義、
木岡教授によるミニ講演「元気と勇気を解発するキャリア・リデザイン
― 職業クライシス時代を生きる事務職員のために―」

発表レポートでは、「いわてのグランドデザイン～みんなでできる実行策～」を受け、各地域で実践されている具体的取組の中から、二戸支部・遠野支部・胆江支部の 3 支部の事例を取り上げて紹介した。

二戸支部は、経験と職名に応じた職務イメージを学校全体で作り上げることができれば、意識の向上が図られ、適正な事務分担による組織的な事務運営と経営参画ができると考え、研究を進めた。そのために、「経験年数別職務標準表」を作成し、さらに、経験年数に応じた職務意識を学校経営計画に反映させるため、学校教育目標や重点目標を意識した「学校事務経営計画」の作成に取り組んだ。この学校事務経営計画策定の取組を、二戸地区全体に提起し、策定率は確実に上がっている。

遠野支部は、遠野市では、共同実施の可能性として「給与諸手当の業務をする組織」だけでなく「学校経営課題の改善に取り組むためのツール」にもなり得ると考え、業務改善に取り組んだ。具体的に、学校図書館管理システムの導入について、各校の経営課題から市全体で取り組むべき問題として、その改善に向けて共同実施組織と教委が連携して取り組み、成果を上げた。

胆江支部は、中・長期の展望にたった研修計画の策定の必要性から、平成 23 年度に研修計画策定委員会をたちあげ、その答申を受けて、「学校組織マネジメント」を基底とした T J P「胆江事務プラン」を策定した。一人一人が学校経営参画することにより学校教育目標を具現化することを到達目標として具体的に一人一実践を積み上げていく方針で、推進にあたって「自己目標設定シート」「組織マネジメントシート」(略称: えがおシート)を提示し、自分の学校の課題から目標を設定する手法を徹底し、取組を続けている。

実践内容から見てきたものは、各支部の取組方法やアプローチの仕方は地域の実態によって様々(てんでんこ)でも、目的は子どもの笑顔が広がる学校づくりであるということ。長年、子ども・地域と寄り添った実践を進めてきた私たち岩手の学校事務職員は「いい学校」「理想の事務職員」を目指してきた。それぞれが思い描くいい学校のイメージは様々で、一言で表現することは難しいが、いい学校づくりをイメージする核となるものは「子どもたちの笑顔」である。学校事務職員が、チーム学校の一員として積極的に経営に関わり、目標を達成するための一翼を担っていくことで、自分自身も笑顔になり存在意義と達成感を実感できる。学校事務職員として同じベクトルを持ちながら、「てんでんこ」に取組を進めていこう、と提案した。

参加者からの質問では、遠野支部のレポートについて「業務改善に対する教員の反応はどうだったか。共同実施に対する理解は進んだのか。」に対し「業務改善に取り組んでいるのは共同実施だよりを通じて理解いただいていると思うが、直接共同実施になにかということとはなかった。ただ、学校図書館管理システムの研修を教員が対象になって行うので、共同実施のおかげだとは捉えていないと思うが認識はあるかと思う。一方で共同実施だよりに載せた児童手当について取り上げた時は反応が良かったことから、アンケートをとっていないので分かりにくい部分ではあるが、たよりを出す前よりは認識が広がったと捉えている。」と答えた。また、胆江支部について「研修講座に市町に関する事項と学校教育に関する事項とあるが、この研修の講師はどのようにされているのか」という質問には、「研修については会員から要望を聞き、お話ができる方を探して依頼をしている。県事研でもこのような研修をしているが、講師は、県教委等をお願いしながら、自分たちでも探している。」と答えた。

発表を受けてのグループワークでは、目指すいい学校をゴールイメージとし、現状と課題を確認・分析することで、学校事務職員として何ができるかについて、参加者とともに考えた。グループワークの目的は、事務職員は実際の学校現場で教育目標の具現化(達成)のために何が必要で何ができるのか、実際の行動レベルで明日からゆすぐに実行できることを考える機会とした。グループは8~10人の編成とし、各グループの進行役は岩手県のスタッフ(常任理事等)が務めた。ワークシートを用いて意見を付箋紙に記入しながら討議を進め、討議後3つのグループから内容を発表することにより、参加者で成果を共有した。また、付箋を貼った大きなワークシートを会場後方に掲示し、昼食時に自由に見られるようにすることで多くの考えや方策を知ることができるようにした。

助言者の福島准教授からは、グループワークの中からさらに取り上げて紹介していただき、助言と研修の振り返りについて講義をいただいた。講義の概要としては、研修の自己評価の指標は、レベル1: 満足度、レベル2: 理解度、レベル3: 認識・行動変容度、レベル4: 組織変容度。研修がどのレベルまで達することが出来たか、研修評価→行動→提案・相談とつなげていくこと。

もう一人の助言者である木岡教授からはミニ講演をいただき、レポートの講評も交えながら、これからの学校事務の方向性、岩手の学校事務へのエールをいただいた。講評の概要としては、学校ガバナンスについて、教育行政の責任を学校に当事者責任として押しつけているようにも聞こえる。行政責任を迫る視点が必要で、一人で難しいなら共同して進めようというのが遠野市の共同実施である。二戸の取組のような学校経営参画、経営評価を通じて行おうとする仕組みが教育行政に広がれば、当事者責任の範囲や限界を根拠を持って示すことが出来る。そして一人一人がたくましくキャリア発達していくために胆江の取組が活きる。(てんでんことという言葉について) 学校に基礎を置く事務改善の方法として、城の石垣に例えてみると、石垣の個々の石は、形はてんでんこだが全体では強固なものになる。それぞれの状況が違うので、うまくいった事例を真似してもダメ。地域に根ざし、地域とともに、地域協働へてんでんこに取り組んでいくこと。事務職員の仕事は何も規定されていない分、可能性を秘めており、多様な解釈ができる。今こそ時代の変化に対応しうる新しい事務職員の「そうぞう(想像、創造、創像)」が必要であり、いかに次の世代へ繋げていくかが大切である。

参加者から木岡教授への質問では、「何かを提案しても何回も却下されてしまい、どうせ言ってもダメだろうと思ってしまう。ここから脱却するためにはどうすればよいか。」について、「1人ではなくあと2人仲間を見つけ3人でやること。何かしようと思ったら3人で動くのがよい。ある程度やってみてから、成果や証拠を持って提案してみる。3人で当たれば相手は否定しにくくなる。相手の機微にうまく訴え情に働きかける。理を持ちながら情を持って情を制す、というアプローチが有効になる。」という助言をいただいた。

3 成果

○ レポートについて

- ・ 内容を分担して作成し、委員長のリーダーシップのもと構成し練り上げられたものとなった。いわてのグランドデザインを具現化する事例を紹介し、事務研のこれまでの研究を総括する内容とすることが出来た。
- ・ 発表レポートのうち、二戸支部の実践である経験年数別職務標準表は、「学校事務の8領域の経験年数別職務標準」の経験年別担当の欄を職名にあてはめて考えられたものとなっている。さらに二戸支部の「学校事務経営計画」のモデル案作成の参考となったのが、「みんなでできる実行策」にある学校事務経営計画である。このことから、着実にいわてのグランドデザインの具現化の取組がなされていることを再認識できた。
- ・ 遠野支部の実践は、「みんなでできる実行策」では共同実施組織の確立に関わるもので、これまでの県費処理業務から学校課題解決(=市の課題解決)に取り組むためのツールとしての共同実施のあり方を発信できた。
- ・ 胆江支部の実践は、「みんなでできる実行策」の研修制度に関わるもので、目標設定シートとえがおシートを活用した自己研修を、支部全体の取組として徹底して取り組むことにより、学校事務職員の資質向上を目指すものである。県大会発表から全国大会発表につながり、より広い範囲に実践を発信することができた。

○ 資質向上・スキルアップについて

- ・ いわてのグランドデザインの目的と各地域の実践を再認識し、今後に自信を持てるものとなった。
- ・ 分科会の準備にあたり、発表に関するメインの動きは研究部としたが、運営面では研修部も協力して県大会の運営ノウハウを参考として進めることができた。

- ・ グループワークでの進行役を非常任理事（現役員）及び常任経験者にお願いし、実践経験とすることが出来た。分科会前日に、打ち合わせを兼ねた模擬グループ討議をしたことも役立った。
- ・ グループワークでは、若い人たちがしっかりとした意見を持っていることが分かった。
- ・ 記録者の村上さんによる、最終日のまとめの会での分科会報告が素晴らしかった。わかりやすく、かつ印象的なまとめで、特筆すべきものであった。また、大会後の記録集（大会報告書）の作成をもう一人の記録者の長坂さんに尽力いただいた。期限内に迅速に進め、緻密かつ客観的にまとめることができた。

○ 助言者について

- ・ 木岡教授から、てんでんこに深い意味があることを、新たな解釈も含めて発信していただいた。
- ・ 福島准教授は昨年からの連携・協力していただいているが、さらに岩手の学校事務について理解を深めていただく機会とすることが出来た。福島先生ご自身も全国大会を知る機会となり、今後更なる連携へつなげることが期待できる。

○ 大会後の展開について

- ・ 山形大会の発表の中から遠野市の実践が、平成 28 年度「第 1 回学校マネジメントフォーラム」（文部科学省主催、全事研共催、平成 28 年 10 月 28 日開催）での事例発表へとつながった。
- ・ 山形大会分科会発表に向けた特別研究委員会の取組が、平成 28 年度第 1 回岩手県教育委員会教育長表彰を受賞した。
（全国公立小中学校事務研究大会山形大会発表特別研究委員会として団体受賞）

4 課題

- レポートの作成は早めに進み、予定どおり平成 27 年度中に完成したが、特別研究委員の大半が新年度に異動したこともあって発表のための準備が遅れ気味となり、全体的な計画に大きく影響を及ぼした。
- 県外の参加者が、グランドデザインの資料（パンフレット）を HP で見られないこと。参加者の目的のひとつに資料の入手があるので、対策を講じる必要がある。
- ファシリテーターなどの、運営にかかる勉強不足。今後は、研究の進め方や内容だけではなく、発表や運営に関するスキルアップのための研修、人材育成が必要。

5 発表及び運営スタッフ

- ◎特別研究委員： 下村 隆（委員長） 菊池和子（委員） 及川正良（委員） 阿部知恵（委員）
高橋広道（会長） 吉田純（副会長） 柴内真由美（研究責任者）
- ◎運営協力者： 米澤倫子（副会長） 高橋琢也（研修部長） 清水辺誠（研究部長）
上路克彦（総務部長） 林佳奈子（総務部） 藤澤信吉（研究部）
小野 順（研修部） 村上誠一（研修部）
長坂征子（総務部理事） 佐々木ルミ子（総務部理事）
小野寺勝（27 年度研究部） 佐々木高弘（27 年度研修部）
高橋祐恵（研修部） 有原美記江（総務部） 泉山綾子（総務部理事）